

福岡県立ひびき高等学校 平成30年度 学校自己評価表 (定時制課程)

(計画段階・実施段階)

福岡県立ひびき高等学校長 印

17

学校運営計画(4月)

評価(3月)

学校運営方針

校訓「自助・自敬・信愛」のもと、単位制・三部制の特性を活かした教育活動をととして、生徒の個性・能力を伸長し、豊かな感性と創造力を養うとともに、社会の一員としての強い自覚と実践力「生きる力」を身に付けた人間性豊かな生徒の育成を目指す。

昨年度の成果と課題

具体的目標

開校15年目の昨年度は、単位制・三部制の高等学校であるひびき高校の特色・存在意義・求められる姿は何か、ひびき高校の根幹を問い直す一年間と位置づけ、第2次ひびきプランの検証・評価や学校行事、教育活動の見直しを行った。教職員間の意見交換も進んでおり、学校行事、教育活動の見直しについては一定の成果があがりつつある。  
 高校教育改革、高大接続改革の姿が具体化していく中、授業改善は待ったなしの状態になっているが、教員個々の取組になっており、学校全体の取組になりえていないことが大きな課題である。  
 今年度は、学校としての授業力向上を第一の目標とし、全教員が「授業を通して何を伝え、何を身に付けさせるか」を明確にした授業展開に取り組む。また、全教職員がカリキュラムマネジメントの意識をもつことで、第2次ひびきプラン、学校行事、教育活動の検証・評価・見直しを行い、年内に第3次ひびきプランを策定する。

年度重点目標

不断の授業改善  
 授業ごと、単元ごとの到達目標を明確にし、「授業を通して何を伝え、何を身に付けさせるか」を意識した授業展開を推進する。教員と生徒が目標を共有し「わかって学びたい授業」「対話と規律ある授業」「日々鍛えて褒める授業」の具現化に取り組む。授業を通して生活指導・進路指導のあり方を追求する。

心の教育の推進  
 HR活動、体験活動や地域との交流を通して心の教育を充実させ、規範意識、倫理観、道徳心、人権意識などを醸成する。ボランティア活動を推奨し、積極的に地域に打って出る。人権教育について、教員研修のあり方、特設人権教育のあり方を検討し、ひびきにふさわしい人権教育を推進する。

学びあい、支えあう教職員集団作り  
 日々の教育活動を通じて互いに高めあい、教師力・学校力を向上させる。ひびきメンター制度の効果を挙げるための方策を検討し、活発な意見交換が行われる職員室を目指す。生徒との人間関係・信頼関係作りを努め、チームとして多様な生徒へ対応することで不登校や中退の抑制・防止を目指す。

カリキュラムマネジメントの実践  
 全職員がカリキュラムマネジメントの意識をもち、日常的教育活動を常に検証・評価し、スピード感をもって改善していく。会議のあり方・会議に頼らない意思疎通のあり方について検討する。ボトムアップ・トップダウンの融合で意見交換を進め、生きた仕組みづくりを目指す。

ユネスコスクールの取組の推進(ESDの推進)  
 環境教育、国際理解教育を推進し、地域活動や生徒海外研修などの交流活動に積極的に参加する。ひびきらしいボランティア活動のあり方について検討し、持続可能なボランティア活動の枠組みを作る。ESDをひびき高校の特色作りのチャンスとして捉え、他のESD校(小中学校を含む)との交流を模索する。

A

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)	次年度の主な課題			
教務部	○単位修得率を80%以上を目指す ○広報の充実を行う ○チームひびきの連携強化	不断の授業改善が出席率向上に繋がり、「日々鍛えて褒める」ことを実践していく。普段の生徒を把握することや電子黒板や図書館等の活用によりアクティブラーニングなどの授業を実践していく。 より適切な入試相談ができるように、教員のスキルアップを目指す。中学校訪問や体験入学会、HP等で情報の発信を常に行っていく。職員の連携強化のために、報連相の一つとして、適切に情報共有できるように、早く正確な月別行事予定など作成していく。保護者教師会や同窓会とも連携を深めていく。	A	○単位修得率は年々向上しているが、生徒の一部に依然として安易な欠席や遅刻が目立っており、今後の大きな課題と考えている。今年度より単位認定基準を厳格化した。今後さらに生徒の自覚を促すため、一部欠課制度の改変等を検討したい。 また、教務課が把握・管理する諸データを全職員に有用な形で提示する取り組みを今後も継続するとともに、教務に係る諸様式や諸手続の簡素化・明瞭化をいっそう進め、職員の負担軽減に努めたい。			
	教務課	前期・後期合計の単位修得率を80%に乘せる(前年度実績79.2%)	定期的に、全体の出席率や一部欠課の人数などをHRや掲示などを利用して生徒に示す。 講座担当者による授業改善や生徒への関わりを通し、「出席したくなる授業」を推進する。 小テストなどスモールステップを重ねることで生徒が「学力が向上したことを実感できる授業」を推進する。	C A A	○入試関係においては、新転任の先生方の入試相談スキルを上げていくための計画性が欠けていた。適宜声をかけながら一緒に入試相談を行ってきたが、結局は経験のある先生が対応することが多く、また、どの先生がどこまで対応できるかを把握するまでには至っていなかった。次年度は例えば「ペアで3回は願書配付を行う」など決めて、目に見える形で入試相談のスキルアップを図っていく必要がある。 広報活動では体験入学会の参加者が過去最高(324人)となり、HPのトップページ閲覧数も増え(11月時点:約7万8千回・H29:約6万1千回)、一定の成果が見られた。昨年の更新の流れを継続し、新たに39メールとの連動が実施できたのも要因の一つと思われる。中学校訪問では年1回の訪問と担当校数を減らし、質の充実を図ることができた。関心を持っている生徒や保護者が確実に増えてきているため、次年度はパネルディスカッションの方法や生徒発表表等の内容を検討し、さらに充実した広報活動を実施する必要がある。		
		入試広報課	入試相談・願書配付を教務部や校務運営委員会が円滑に実施できる体制作り	入試業務研修会を年1回(週3コマの枠を設けて)実施する。 教務部の入試相談・願書配付の研修を3回行う。 入試相談割を年2回、願書受付割を年4回(後期・1期・2期・転編)作成する。		B B A	
			広報活動の充実による志願者数10%の増加	中学校訪問を年1回行い、中学生進路相談事業(2・3学区)に参加する。 学校説明会と体験入学会を年1回実施し、中学校の高校説明会に20校以上参加する。 ポスターと学校案内パンフレットを年1回作成し、学校HPを年100回以上更新する。		B A A	
		庶務課	他分掌との連携を図り、業務や行事が円滑に行える体制づくり  図書教育の活性化と保護者教師会の充実	他分掌との連絡・調整を密にし、業務や行事の円滑化を図る。 月別行事予定を1ヶ月前に知らせる。 前年度の反省点を踏まえ今年度の計画を立案する。		B A A	○月別行事予定には関しては計画通りに回覧・起案を行うことができた。各部で2度確認することが、ミスの防止につながった。事務室前のディスプレイの変更も確実に行った。学校図書館の利用マナー等は概ね良好である。次年度もより利用しやすい環境づくりを心がけたい。行事等の計画を立てる際は、事前に昨年度のアンケート結果を確認した。反省事項等、改善できる点は計画に反映させた。次年度もアンケート結果を確認した上で、円滑に行事等が運営できるよう計画を立案していきたい。
	学校図書館の活用や視聴覚教材を活用した授業の促進。 役員会や執行委員会への積極的な参加を促し、保護者との連携を図る。 総会出席率と委任状回収率の向上を目指す。			B B B			
	生徒指導部	○第2次ひびきプラン「ひびきたほめ」を推進し、生徒の可能性を伸ばす。 ○規範意識の向上を図り、互いの存在を認め、安心・安全な学習環境を確保する。 ○上記を通して責任ある行動がとれる自主的な集団の育成を目指す。		A	○「マナーアップひびき」を第5段まで実施することができ一時的に一部欠課の減少に繋がったが、その成果は最後まで継続することができなかった。ボランティア活動を行うことで、今年度は増加単位、次年度は学校設定科目としての単位認定ができるようになり、今後も更なる成果が期待でき、基本的な生活習慣の確立に大きな成果が出た。90周年記念式典やひびき祭などの学校行事は生徒会を中心に多くの生徒の頑張りにより充実することができた。しかし、全く関わっていない生徒もあり、多くの学校行事で出席率が80%を超えることはなかった。  ○「3、6ルール」の新システムについては、生徒の情報を自ら取りに行く行動力と情報活用能力の向上を教科担当者の負担軽減を目指し行った。タッチパネルを見ていない生徒の対応が課題である。また、いじめ防止委員会はアンケート後2週間を別途に開催し、案件があればその都度開催する。家庭用チェックリストについてもいじめアンケート同様に担任の聞き取りの上、いじめ防止委員会への報告も行う。生徒情報交換会は他分掌との連携も踏まえ、30%ルール抵触生徒の対応、合理的配慮を要する生徒の対応等を始めとして本校の単位制システムと生徒への出席連絡や可否確認など担任の負担軽減を検討しなければいけない。また、修学の意味のない生徒への対応や修学の意思はあるが、登校できない生徒対応等の課題が残る。  ○クリーンアップひびきは予定通り行う事ができ、校内美化活動を実践できたが、通常の清掃活動では5、6限受講生徒全員を参加させることが難しかったので、次年度は方策を考え清掃活動の参加率を上げる必要がある。また生徒の個別相談では修学課、保健室、特別支援コーディネーターと連携を図ることにより、さらなる支援を行いたい。就学支援引き継ぎシートに名前を変更し、これからの管理、活用の方法を検討していく。		
		生徒指導課	基本的な生活習慣の確立	「マナーアップひびき」を第5段まで実施する。 校外でのボランティア活動を年5回行う。 通常授業時は朝の校門指導を毎日行う。		B A A	
			学校行事、生徒会活動の活性化	ひびきサマーキャンプ等を活用し部活動加入率を40%以上にする。 生徒会役員を中心として校外清掃活動を長期休業中に年2回行う。 学校行事の充実を図り行事出席率を80%以上とする。		A B B	
				修学課		不登校や中途退学の未然防止・抑制のための修学支援体制の充実を図る。	授業欠課時数「3、6ルール」の教科担当のタッチパネル入力と担任に報告を各1回必ず行う。 いじめアンケートは毎月1回、家庭用チェックリストは年2回集約する。 月1回の生徒情報交換会では、生徒対応の具体例を提示する。
		保健課	教育環境の整備に向けた取組を図る。  保健室経営を充実し、個別の健康相談に対応できるようにする。			研修部と連携して生徒理解を深める教員向けの研修会を年2回行う。 出席率30%以下の生徒の名前が2回挙がった生徒に対しての対応システム 出席率30%以下の生徒を持つ担任と専門職をつなぐシステム	A A B
				月別の重点目標を決め、毎月1回「クリーンアップひびき」を実施する。 該当生徒全員が参加し、通常の清掃活動を充実させる。 掃除道具の点検・整備を前後期1回実施し、校内美化活動を充実させる。		A A A	
SCや訪問相談員と連携し、組織的な支援を行う。 諸検診で綿密な計画を立て、円滑に実施できるようにし、受診率100パーセントを目指す。 個人カルテを活用し、教員間で情報共有を行う。				A B A			
ガイダンス部				○生徒が将来像を描く一助となるガイダンス事業を展開する。 ○すべての場をキャリアカウンセリングの場と捉え、生徒一人一人の資質と進路志望を把握する。 ○生徒が「意欲ある学び」を継続できる学習環境整備に努める。			A
				進路ガイダンス行事を積極的に活用する生徒の育成		事前指導の2回以上の実施 3講座以上の講座の入れ替えおよび精選	B A

ガイダンス部	ガイダンス課		時間割作成につなげる事後指導の実施	B	A	なものと異なることを目指す。上級学年カイトグスは原則指導での周知、さらには直後に時間割作成が控えており、進路意識を高める良い機会となった。11月以降はガイダンスプロジェクト等を通じて、生徒一人ひとりに適切な指導を行い、ガイダンス能力の向上を図った。新設講座や前年度からの変更点について、職員・生徒へ周知する方策については、校内研修会の内容も含めて常に探っていく必要がある。		
		進路実現のための適切な時間割作成ができる生徒の育成	校内研修会の4回の実施	A				
			ガイダンスプロジェクトの活性化 学習ガイドブックの改訂・見直し	A				
	進路指導課	自分の進路について主体的に考え行動できる生徒の育成	高大等連携事業への参加者10名以上	A	A	○生徒に、進学に対応できるだけの学力をつけさせる方策が必要である。卒業年次だけでは間に合わないため、新入、在校年次の段階で、学習する習慣をつけ、模試を受験するよう指導する。クラスによって差がないようにするため各模試での指導の方針を示す。特に、特進クラスについては、生徒の意識向上と学習習慣の定着化を図るために、各講座の担当者と連携して指導する。		
			HRでの進路講演会の実施5回 学校説明会・オープンキャンパスへの参加の推奨	A				
		進路実現に向けて努力する生徒の育成	模擬試験の継続的受験の推奨 個別指導の体系化 推薦基準の周知徹底	B B B				
	進路渉外課	適切な勤労観・職業観を持った生徒の育成	インターンシップ(在校年次)の充実	B	A	○インターンシップをもっと生徒が活用できるよう、早い段階での周知(単位認定等)をすることが必要である。また、応募前職場見学に関しても早い段階(夏休み)に参加する生徒が増えることで、内定率も必ずから向上すると考える。		
			応募前職場見学(卒業年次)の積極的活用 就職内定率の向上(2月末に90%以上)	A A				
		長期的視野に立った進路意識を持った生徒の育成	奨学金制度の周知・活用	A	A	資格取得については様々な教科で積極的に実施しており、生徒も意欲的に受けている。生徒の意識をもっと高めるために、この検定が将来どんな場面で役立つか(入試等でのように活用できるか)を発信することでより多くの参加を促したい。		
			資格取得率、検定合格率の向上 講演会等における外部講師の積極的活用	B A				
	研修部	研修部	○生徒・教職員にとって魅力のある学校教育活動を創造するために、教職員の専門的資質を高める支援の充実を図る。 ○公開授業(研究授業、授業相互参観)による授業研修をはじめ、生徒による授業評価を実施し、授業の充実を図るとともに、校内職員研修を充実し教師力の向上により教育活動の活性化を推進する。 ○各種研修会については、他分掌との連絡調整を十分に図り、校内の研修の体系化と内容の充実を図る。 ○生活体験発表会等の行事の効果的実施により、本校で学ぶ意義や喜びを再確認させ、日々の学習活動への積極的な参加を促し学校への帰属意識の高揚に努める。 ○ESDに関する教員の理解を深め、持続可能な社会の担い手となる生徒の育成を目指す。生徒海外研修、ユネスコやその関係機関・団体が行う活動に主体的に参加できるよう企画・運営する。		A		○生徒による授業評価については、アンケートの質問項目の再検討や実施時期などの変更を行った。また、他の授業週間と時期を合わせることで効果的な相互授業参観が実施できた。授業改善研修会では、意見交流の場を設け、新たな試みを提案することはできた。しかし、全てにおいて先生方の理解や協力と言った場面では、周知はできておらず、さらに効果的な研修課の取組を考える必要がある。また他の課の研修会においては、連携ができておらず大きな反省点である。連携の在り方を検討し、実施時期や実施内容など全体を見通した運営が必要である。  ○今年度実施を予定していた企画は一通り実施できた。実施に際しては他の分掌や教科を横断的に巻き込む形でやりたいと思っており、今年度の講演会は人権・同和教育推進委員会との連携、ESD授業週間は相互授業参観と人権教育授業週間とをひとまとめにしての開催で行った。まだまだ改善点は多々あるが、とりあえずの一步を進めることができたと思うので、次年度もさらに連携を広げていきたいと思う。残念ながら今年度は国際交流の受入(タイ)が頓挫したり、エコライフステージが台風で中止になったりと、活動が思うように行えなかった。エコライフステージに関しては、参加生徒の募集方法や展示内容について次年度大いに検討する材料がある。	
			研修課	授業力・教師力の向上	授業評価の在り方を見直し、効果的に実施(年2回)する。 他の授業週間と連携し、目的意識を持った授業研究を推進する。 授業力向上を目的とした意見交流の場や学習会を企画する。	B A A		A
校内・校外研修会の充実		修学課と連携し、生徒理解を深める研修会(年2回)を実施する。 ガイダンス部と連携し、進路指導力向上のための学習会を企画する。 生徒部と連携し、地域活動への参加を推進する。		A A B				
ESD課		ユネスコスクールとしてのESDの推進	ESD授業週間の実施(年1回) 関連講演会の実施(年1回) ESD教育につながる外部団体実施の活動や研修への参加(随時)	A A A	A			
			環境シンポジウムなどでの発表、展示(年1回) 国際交流の積極的な受入(年1回以上) 海外研修の実施(年1回)	B B A				
		環境教育と国際理解教育の充実				B		
年次部		年次部	○規範意識を確立させ、基本的な生活習慣を身に付けさせる。 ○生徒一人一人の自己実現に向けて、自ら学ぶ態度及び自ら考え行動できる資質を養う。 ○年次の教員間および保護者との連携を緊密に行い、迅速かつ生徒にとって適切な対応を心がける。		B			○年度初めは全ての面において丁寧な指導が必要である。担任による生徒との面談で生徒把握に努めることができた。進路目標が曖昧な生徒も多いので、後期の初めにも面談の時間が確保できれば、受講ガイダンスもスムーズに取り組める。欠席の多い生徒や長欠の生徒は迅速な対応、専門職との連携が必要である。5月の保護者面談月間に多くの保護者に来校していただき、理解していただくことができたので、保護者からの苦情やトラブルもほとんどなかった。特別指導の生徒に面談等で年次の教員が多く関わったが、その後の学校生活に改善が見られないこともあった。  ○4月・10月の学期スタートの面談については、必要な生徒の取りこぼしがないように徹底しておきたい。とくに30%ルール対象生徒に対しては管理職面談を計画するのがよい(在校Ⅲは実施)。問題行動の抑制・防止に関しては目標を達成することができたが、日頃から生徒へ呼びかけ続ける必要がある。さらに中途退学者を減少させるために、早期の生徒対応と関係分掌との連携が大切である。進路目標を早期に確定させ、具体的な目標(校外模試・強化教科など)を掲げ、進路指導をすすめていく。  ○年度初めの生徒との面談時間の確保に工夫が必要である。進路別学習は円滑に効果的に実施できている。担当以外の進路学習の内容も把握できるようにしたい。三者面談は参加しにくい保護者への対応を柔軟にしたい。就職内定後や推薦入試合格後の辞退はできないことを繰り返し保護者や本人に伝えておく必要がある。模擬試験を受験しないために、どのように勉強をすればよいか分からないままの生徒がいた。特設授業では就職差別をなくすための取り組みについて説明し、有意義だった。後期のHRでも人権教育関係のDVDを視聴する機会を設けて生徒の人権意識を高揚できた。
			新入年次部	規範意識を身につけさせ、問題行動の抑制・防止(前年比10%減)に努める。 修学課、SC、SSW、訪問相談員との緊密な連携により、不登校生徒の早期対応に努め、中途退学者を減少(前年比10%減)させる。 学校行事や成績に関する生徒連絡等タッチパネル活用の指導(前年比30%増)を行う。	B B B	B		
		電話連絡・家庭訪問・保護者面談等を通じて家庭との連絡を密に行い、授業出席率(80%)と単位修得率(80%)の向上を図る。 進路希望調査、近未来ガイダンス、受講ガイダンス等を通じて自己の興味・適性を認識させる。 年次通信を定期的(年8回)に発行し、家庭との連携を図る。		B B B				
		在校年次部	生徒指導を徹底し、問題行動の抑制や中途退学者の減少に繋げる。 修学課、SC、SSW、訪問相談員との緊密な連携により、不登校の防止に努め、中途退学者を減少(前年比10%減)させる。 学校行事や成績に関する生徒連絡等タッチパネル活用の指導(前年比30%増)を行う。	B B B	B			
			遅刻・早退・欠席を減少させ、授業出席率(80%)と単位修得率(80%)の向上を図る。 校外模試・検定試験受験やインターンシップへの積極的な参加を促し、参加者の増加(前年比10%増)を目指す。 年次通信を定期的(年8回)に発行し、家庭との連携強化を図る。	B B A				
	卒業年次部	年次部職員全員で生徒の個性や能力・適性に応じた指導をすることで希望進路を実現する。	個人面談を少なくとも2回は行う。 HR・総学の時間に進路別学習を5回実施する。 年次通信を7回発行し、三者面談も少なくとも1回は行う。	B B B	B			
			面接を希望する生徒に年次部職員で組織的に指導し3回は面接する。 就職模試、進研模試等の年3回以上実施し、受験を奨励する。 特設授業等を有効利用し、人権感覚を涵養する。	B B B				
		様々な機会を利用して生徒の自己管理能力を高め、社会人としての基礎力を身につけさせる。				B		